

自閉症者の生活状況に対する生活支援員の捉え方

松 山 郁 夫

Recognition of Life Support Staff about Life of the Person with Autism

Ikuo MATSUYAMA

要 旨

本研究の目的は、生活支援員が自閉症者の生活状況をどのように捉えているのかを明らかにすることである。このため、障害者支援施設の生活支援員を対象に、自閉症者の生活状況に対して意識する程度を問う、独自の質問を記載した質問紙票によるアンケート調査を実施し、有効回答がなされた297人の回答を分析対象とした。質問項目について因子分析を行った結果、生活状況に対して意識していることについて、第1因子「社会適応技能を捉えること」、第2因子「心理状態を捉えること」、第3因子「日常生活技能を捉えること」が抽出された。また、意識する程度が高い方から「心理状態を捉えること」、「日常生活技能を捉えること」、「社会適応技能を捉えること」であった。これらの因子は、生活支援員が自閉症者の生活状況を捉える視点と考察した。

Key words : 自閉症者、障害者支援施設、生活支援員、生活状況

I. はじめに

自閉症はコミュニケーション障害を主症状とし、対人関係形成に著しい困難を示す。また、自閉症のおよそ75%に知的障害が認められる¹⁾。自閉症の基本的な障害として、言語障害、前後関係の理解の障害、抽象の障害、コード化の障害の4つが指摘されている (Rutter & Shopler 1978)²⁾。このような障害は自閉症児者の社会適応を困難にしている。また、自閉症があると、独特なこだわり等周囲に了解できない行動があり、状態像を捉えることが困難なこともあって、自閉症に対する周囲の理解が進まない³⁾。

自閉症の相談を行う機関では、家族や支援者から、こだわり、パニックなどの行動障害への対応が困難との相談が多い⁴⁾。発達的に見た自閉症の認知障害は発達の遅滞の障害として現れ、加齢とともに変化していく。認知の構造は、自閉症という特徴を持ちながらも一人ひとり異なった発達をし、発達の過程の中で修復されたり不均衡さが目立ってきたりする⁵⁾。

このように、自閉症には、独特な障害特性があり、特に人間関係の障害があることで社会適応に困難さがある。しかしながら、自閉症と診断され、共通した自閉症の症状があったとしても各々の状態像は異なるため、一人ひとりの状態を把握したうえで、各々に応じた生活支援をする必要があると考えられる。

青年期・成人期に達した自閉症者で知的障害を併せ持つ場合、地域における自立生活が困難なため、障害者支援施設（旧体系における知的障害者更生施設）等の福祉施設に入所するケースが多い。日本では、1981年に自閉症者施設が開設されたが、知的障害者福祉制度を活用したもので、自閉症に対する独自の枠組みで制度化されたものではなかった。現在、旧体系での知的障害者更生施設は、2006年4月に施行された障害者自立支援法第5条に定義される「障害福祉サービス」の中で主に「施設入所支援」として位置づけられ、「障害者支援施設」とされている。障害者自立支援法による指定を受けて「指定知的障害者支援施設」と呼ばれることになる。

旧体系における知的障害者更生施設は、2012年（平成24年）3月末までに新しい障害福祉サービス体系に移行した。障害者自立支援法は、要援護者の身体状態による介護度によって支援がなされる制度であるため、自閉症という独特な状態像を示す障害に対応しているとは言い難い。なお、2011年度に全国自閉症者施設協議会には66施設が登録しているが、その多くは入所タイプの障害者支援施設となっている。

自閉症者の生活支援を行う障害者支援施設では、自閉症者の障害を軽減しながら社会適応ができるようにするために、他者との人間関係の交流を通して行動を展開させていく必要がある。したがって、その担い手であり、日常生活の支援者である生活支援員には、自閉症者の生活支援を行うために、自閉症者とコミュニケーションをとる必要がある。

障害者支援施設において、生活支援員は自閉症者の行動に関して、自閉症者とのコミュニケーションが成立しないことによって、内面の心理的特性を捉えることに困難さがあると認識している⁶⁾。このため、自閉症者とのコミュニケーションをとることができるように「受容的配慮」、「言語的配慮」、「動作的配慮」、及び「視覚的配慮」を心がけている⁷⁾。したがって、生活支援員は、自閉症者の独特な行動特徴等を踏まえながらコミュニケーションが成立するように配慮し、障害を軽減するように図っていると考えられる。このように、生活支援員には、自閉症者に対してコミュニケーションをとりながら生活状況を捉えたいうで、生活を支援することが求められる。

以上のことから、本研究では、障害者支援施設の生活支援員における自閉症者の生活状況に対する捉え方を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ. 方 法

1. 調査対象と調査項目

本研究では、自閉症者が入所している障害者支援施設の生活支援員を対象として、自閉症者の生活状況に対する意識の程度を問う、独自の質問を記載した質問紙票によるアンケート調査を実施した。

調査対象は、全国自閉症者施設協議会に加盟している入所タイプの障害者支援施設（旧体系における知的障害者更生施設）において、青年期・成人期の自閉症者の生活支援を行っている生活支援員とした。無記名で独自に作成した質問紙を郵送により配布・回収した。合計331人の回答のうち、全項目に回答している297人の質問紙調査票を有効回答とし（有効回答率89.7%）、分析対象とした。

調査項目については、回答者のプロフィールに関する性別、年齢、職種、自閉症に関わった年数、支援している対象者のライフステージと障害種類、所属する施設の種類の種類を付記した。

分析対象者のプロフィールは次の通りであった。

性別は、男性164人（55.2%）、女性133人（44.8%）であった。

年齢は、21歳から74歳で、平均年齢34.1歳、（標準偏差：9.6年）であった。

自閉症者に関わった年数は、1年から36年で、平均6.3年（標準偏差：5.7年）であった。

なお、分析対象者297人全員が、主に関わっている対象者の時期については青年期と成人期、障害種類は知的障害のある自閉症であった。

2. 調査期間と調査方法

調査期間は、平成23年11月1日より11月30日までの約1か月間とした。

調査方法は、全国自閉症者施設協議会に加盟している入所タイプの知的障害者更生施設66か所に、独自に作成した質問紙調査票を郵送にて配布し回収する方法にて実施した。21か所（送付した施設の31.8%）から回答が得られた。なお、倫理的配慮として、質問紙調査票を郵送した施設に対して、調査の主旨とデータの分析に際しては、すべて数値化するため施設名は一切出ないことを文書で説明し、回答をもって承諾が得られたこととした。

3. 調査内容と分析方法

質問紙調査票の作成にあたっては、自閉症者の生活支援を行っている入所形態の障害者支援施設（旧体系における知的障害者更生施設）の生活支援員10人に、支援している自閉症者の生活状況に関して気になっていること、及び生活を支援するうえで意識していることを尋ね、複数回答があった28項目を質問項目として使用することにした。

自閉症者の生活状況に対する意識の程度を問う独自の28項目の質問項目における回答は、「まったく気にしていない」（1点）、「あまり気にしていない」（2点）、「どちらとも言えない」（3点）、「ある程度気にしている」（4点）、「かなり気にしている」（5点）までの5段階評価とした。なお、各質問項目について、等間隔に並べた1～5までの数字のうち、あてはまる数字に○を付けるようにした。

以上の質問項目への回答に対する分析方法として、各質問項目の平均値と標準偏差を算出した。次に各質問項目について Promax 回転を伴う主因子法による因子分析を行った。また、因子分析によって得られた各因子の下位尺度に相当する項目の平均値を求めた。その際、因子ごとの項目数が異なるため、算出された平均値を項目数で除したものを平均値として示した。さらに各因子の下位尺度に相当する項目の平均値を用いて、各因子間で平均値に差があるかどうかを検討するために、対応がある場合の一元配置分散分析を行った。なお、各因子の Cronbach の α 係数を求め、各因子別、および全体としての内的一貫性を有するかどうかの検証も行った。

Ⅲ. 結 果

各項目の平均値・標準偏差については表1の通りであった。平均値の最小値は2.42（「27. 金銭管理の技能」）で、最大値は4.62（「11. 情緒の安定」）であった。全28項目中、4項目が2点台（14.3%）、14項目（50.0%）が3点台、10項目（35.7%）が4点台であった。

これら28項目について、Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度は0.87であった。また、Bartlett の球面性検定では有意性が認められた（近似カイ2乗値 3963.38 $p < .01$ ）。このため、28項目については因子分析を行うのに適していると判断した。

これら28項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は、8.46、2.62、1.93、1.45、1.25……というものであり、スクリープロットの結果からも3因子構造が妥当であると考えられた。そこで、3因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった7項目を除外し、再度、主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。回転前の3因子

で21項目の全分散を説明する割合は52.34%であった。なお、これらの21項目について Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度は0.85であった。また、Bartlett の球面性検定では有意性が認められた (近似カイ2乗 3115.40 $p < .01$)。Promax 回転後の最終的な因子パターンは表2の通りであった。

各因子の Cronbach の α 係数を求めたところ、第1因子に関しては $\alpha = 0.89$ 、第2因子に関しては $\alpha = 0.72$ 、第3因子に関しては $\alpha = 0.81$ であり、全項目で0.90との値を示したことから、各因子別に見ても、全体としても、内的一貫性を有すると判断された。

第1因子は、「他者との交流」「周囲の雰囲気を感じとること」「文字を読むこと」「文字を書くこと」「集団行動」「会話の技能」など、主として他者と交流したり、意思や情報を伝達したりするのに必要な技能に関する内容を内容としていたため「社会適応技能を捉えること」と名づけた。

第2因子は、「情緒の安定」「意思や要求の表出」「自傷行為」「他害行為」など、主として情緒的に不安定になりやすかったり、意思の表明が難しかったりするような障害特性に関する内容を内容としていたため「心理状態を捉えること」と名づけた。第3因子は、「掃除機を使ったり掃いたりする掃除の技能」「洗濯機を使ったり干したりする洗濯の技能」「歯磨きの技能」「衣服の着脱動作」「食事の動作」で、日常生活を行う技能に関する内容を内容としていたため、「日常生活技能を捉えること」と名づけた。

因子別の平均値 (標準偏差) は、第1因子3.04 (SD : 0.74)、第2因子4.26 (SD : 0.47)、第3因子3.54 (SD : 0.69) であった。各因子間の平均値について対応がある場合の一元配置分散分析を行った結果、3因子の平均値間には有意差が認められた (表3)。さらに、各因子の平均値に対して多重比較を行った結果、すべての因子の平均値間に有意差が認められた。このため、生活支援員は自閉症者の生活状況について、第2因子「心理状態を捉えること」、第3因子「日常生活技能を捉えること」、第1因子「社会適応技能を捉えること」の順に意識していることが示唆された (表4)。

表1 自閉症者の生活状況に対する意識についての平均値と標準偏差 n=297

質 問 項 目	平 均	標 準 偏 差
1. 身だしなみ	4.23	.623
2. 歯磨きの技能	3.63	.918
3. 掃除機を使ったり掃いたりする掃除の技能	3.19	.921
4. 洗濯機を使ったり干したりする洗濯の技能	3.17	1.007
5. 他者との交流	3.36	1.081
6. 意思の伝達	4.17	.761
7. 集団行動	4.27	1.157
8. 自傷行為	4.44	.661
9. 衣服の着脱動作	3.81	.837
10. 食事の動作	3.89	.837
11. 情緒の安定	4.62	.563
12. 意思や要求の表出	4.39	.695
13. 会話の技能	3.12	1.017
14. 他害行為	4.62	.604
15. 偏食	3.67	.951
16. 物事への興味・関心	4.11	.764

17. 排泄動作	4.06	.848
18. 余暇活動	4.19	.761
19. 周囲の雰囲気を感じとること	3.10	1.133
20. 作業への参加	4.02	.733
21. 物事に取り組む意欲	3.90	.847
22. 文字を読むこと	2.74	1.042
23. 文字を書くこと	2.68	1.028
24. 手指の巧緻性	3.15	.982
25. 縄跳び等の全身運動	2.71	.977
26. 目と手の協調	3.11	1.056
27. 金銭管理の技能	2.42	1.020
28. レクリエーションへの参加	3.20	1.059

表2 自閉症者の生活状況に対する意識についての因子分析結果

質問項目	第1因子	第2因子	第3因子
第1因子「社会適応技能を捉えること」			
5. 他者との交流	.812	.103	-.178
19. 周囲の雰囲気を感じとること	.793	-.010	-.175
22. 文字を読むこと	.765	-.140	.148
23. 文字を書くこと	.706	-.147	.198
7. 集団行動	.683	.105	-.146
13. 会話の技能	.660	.067	.077
28. レクリエーションへの参加	.562	-.068	.063
24. 手指の巧緻性	.493	.027	.178
26. 目と手の協調	.480	.105	.046
25. 縄跳び等の全身運動	.472	-.040	.152
第2因子「心理状態を捉えること」			
11. 情緒の安定	-.094	.720	-.012
12. 意思や要求の表出	-.148	.629	.054
8. 自傷行為	.064	.617	-.046
14. 他害行為	.006	.542	-.002
16. 物事への興味・関心	.109	.539	-.005
6. 意思の伝達	.163	.516	-.024
第3因子「日常生活技能を捉えること」			
3. 掃除機を使ったり掃いたりする掃除の技能	-.052	-.075	.864
4. 洗濯機を使ったり干したりする洗濯の技能	-.033	-.108	.819
2. 歯磨きの技能	.150	.030	.514
9. 衣服の着脱動作	.044	.279	.514
10. 食事の動作	.009	.302	.467

表3 自閉症者の生活状況に対する意識についての分散分析の結果

区 分	平方和	自由度	平均平方	F 値
生活状況	221.00	2	110.50	509.51*
被調査者	70.17	296		
誤 差	128.39	592	0.217	

*p < .05

表4 自閉症者の生活状況に対する意識についての多重比較による各因子の平均値の差

	第2因子「心理状態を捉えること」	第3因子「日常生活技能を捉えること」
第1因子「社会適応技能を捉えること」	1.213*	.493*
第2因子「心理状態を捉えること」		.720*

*p < .05

IV. 考 察

障害者支援施設（旧体系における知的障害者更生施設）の生活支援員における自閉症者の生活状況に対して意識する程度を問う質問項目の各平均値のうち、4項目が2点台（14.3%）、14項目（50.0%）が3点台、10項目（35.7%）が4点台であった。このため、生活支援員は、自閉症者の生活状況を全般的に捉えようとしていることが窺える。しかしながら、「文字を読むこと」、「文字を書くこと」、「縄跳び等の全身運動」、及び「金銭管理の技能」については2点台であったため、意識する度合いが比較的低いといえる。

青年期・成人期になった自閉症者に関しては、社会的自立ができれば問題はないが、そのレベルまで達しえなかったものの方が多いと指摘されている（村田 1980）⁸⁾。自閉症の障害特性の改善が順調で、社会適応面でも問題がなく、自立した社会生活が可能になるものは少ない。このため、特に知的障害を併せ持つ自閉症者が多く入所している障害者支援施設の生活支援員には、自閉症者の生活状況を全般的に捉えながら生活支援を行うことが求められる。しかしながら、知的障害を併せ持ち、しかもその程度が重度の者が多いために、文字の読み書き、全身の協調運動、金銭管理については、施設での日常生活において習得しておくべき技能とまではいえないと判断しているものと考えられる。

自閉症者には、他者の苦痛に対する反応が弱く、他者の気持ちを察することに困難があるとされている（Sigman, Kasari, Kwon, & Yirmiya, 1992）⁹⁾。したがって、自閉症者の障害を軽減し、発達を促進させるには、他者との人間関係の交流を通して行動を展開させていくことを重視する必要がある¹⁰⁾。自閉症者は、青年期・成人期になっても他者との円滑なコミュニケーションをとることができない等社会適応上の問題があるため、第1因子「社会適応技能を捉えること」は、生活支援員が自閉症者のコミュニケーション能力等の社会適応技能を捉えようとしていることを表していると推察される。

生活支援員は自閉症者の行動に関して、自閉症者とのコミュニケーションが成立しないことによって、内面の心理的特性を捉えることに困難があると認識している¹¹⁾。また、自閉症者が示す不安等に関する感情に対して敏感であり、対人関係の中で表れる感情を感じとることに困難があるため、自閉症者の感情を対人、不安、高揚に関する3つの視点から捉えているとされている¹²⁾。さらに、生活支援員は、自閉症者に対する働きかけ自体に価値を見出しながら日常生活支援を行っている指摘されている¹³⁾。これらのことから、生活支援員は自閉症者の心理を推し量りながら支援していると見られる。したがって、第2因子「心理状態を捉えること」は、生活支援員が自閉症者の心理を捉えようとしていることを表している

といえよう。

自閉症には、特定の刺激のみに強く反応する一方、それ以外に対しては無関心であるという刺激の過剰選択性や知覚過敏がある¹⁴⁾。つまり、自閉症者に周囲の刺激に過剰に反応しやすい特性があることを踏まえた上で、生活状況を把握し、自閉症者に対する生活支援を行う必要がある。自閉症者の自立を目指した支援として、日常生活習慣、余暇活動、職業に関する技能を高めることの重要性が指摘されている¹⁵⁾。障害者支援施設において自閉症者に作業の支援をする際、作業後に好きなものを飲むことができるようにしたり、カードを使って手順がわかりやすいようにしたりすると、集中して取り組むことができるようになると報告されている¹⁶⁾。このように、生活支援員には、自閉症者自身の興味ある作業や趣味などの余暇活動に取り組むことも含めた生活支援が求められるため、第3因子「日常生活技能を捉えること」は、広く生活状況や生活技能を捉えようとしていることを表していると考えられる。

自閉症者の生活状況を捉える場合、障害者支援施設を利用している自閉症の多くは知的障害を伴うため、言語理解の遅れを示すものが多い。言語の発達がみられても、他者のことばをおうむ返しする反響言語があり、相手の意図や周囲の状況に考慮した会話は困難である¹⁷⁾。したがって、生活支援員は、各自閉症者の心理状態を把握したうえで、日常生活技能に応じた生活を支援することになる。こうして、社会適応技能を高める支援が可能となるため、生活支援員は自閉症者の生活状況を捉える視点の優先順位が高い方から、「心理状態を捉えること」、「日常生活技能を捉えること」、「社会適応技能を捉えること」の順番になると推察される。

今後、障害者支援施設において生活支援員が自閉症者の生活状況を「心理状態を捉えること」、「日常生活技能を捉えること」、及び「社会適応技能を捉えること」の視点から検討し、生活支援の意義を明確にする必要がある。

V. 結 論

本研究によって、障害者支援施設的生活支援員は、①自閉症者の生活状況を全般的に捉えようとしていること、②文字の読み書き、全身の協調運動、金銭管理について、施設での日常生活において習得しておくべき技能とまでは言えないと考えていること、③生活状況を捉える際、3つの視点があり、その視点は優先順位が高い方から、「心理状態を捉えること」、「日常生活技能を捉えること」、「社会適応技能を捉えること」の順番であること、以上が考察された。

【引用文献】

- 1) 松山郁夫・内田博昭 自閉症のライフステージにおける療育に対する直接処遇職員の捉え方 佐賀大学文化教育学部研究論文集 12(1) 205-214 2007
- 2) Rutter M, Schopler E Autism: A Reappraisal of Concepts and Treatment. New York, NY: Plenum Press 7 463-474 1978
- 3) 同上 1)
- 4) 石井哲夫 発達障害者支援法の概要と運用の現状 更生保護 57(3) 13-18 2006
- 5) 太田昌孝・永井洋子編著 自閉症治療の到達点 日本文化科学社 1992
- 6) 松山郁夫 「自閉症者の状態に対する知的障害者更生施設的生活支援員の認識」 佐賀大学文化教育学部研究論文集 12(2) 281-287 2008
- 7) 松山郁夫 自閉症者とのコミュニケーションをとるための生活支援員の認識 佐賀大学文化教育学部研究論文集 14(2) 321-327 2010
- 8) 村田豊久 自閉症 医歯薬出版 1980

- 9) Sigman, M., Kasari, C., Kwon, J. & Yirmiya, N. Responses to the negative emotions of others in autistic, mentally retarded, and normal children. *Child Development*, 63 796-807 1992
- 10) 松山郁夫 青年期・成人期の自閉症者が示す感情に対する生活支援員の認識 佐賀大学文化教育学部研究論文集 14(1) 309-316 2009
- 11) 松山郁夫 自閉症者の状態に対する知的障害者更生施設の生活支援員の認識 佐賀大学文化教育学部研究論文集 12(2) 281-287 2008
- 12) 同上10)
- 13) 松山郁夫 自閉症者への生活支援に対する福祉施設の生活支援員の認識 佐賀大学文化教育学部研究論文集 15(1) 151-158 2010
- 14) 篠田達明監修 自閉症スペクトラムの医療・療育・教育 金芳堂 2005
- 15) Brenda Scheuermann, Jo Webber, *Autism: Teaching DOES Make a Difference*, WADSWORTH, 2002
- 16) 松山郁夫・米田博編著 障害のある子どもの福祉と療育 建帛社 2005
- 17) 同上16)

謝 辞

調査に際し、障害者支援施設の施設長と生活支援員の皆様にご協力いただきました。感謝申し上げます。

※本稿は、文部科学省科学研究費補助金挑戦的萌芽研究（研究課題番号：23653149、研究代表：松山郁夫）の助成を受けた研究の一部である。